

# 古墳時代金工製品の技術移転研究

濱 岡 大 輔

技術移転は、新技術の地域間の移動や製品間における同技術の利用など技術の動きを表すものとして用いられており、主に経済学・社会学・技術生産史学といった考古学とは異なる分野で研究されてきたテーマである。

本論では、古墳時代の金工製品、特に金銅製の製品における技術移転を考えていく上で、考古学における技術移転を検討し、他分野での技術移転を考古学においていかに参考できるかを考えてみた。そこで第1部では、他分野での技術移転がどのようなものであるかを認識するために、各分野ごとに要点をまとめ、それぞれの特徴を挙げてみた。経済学では、国と国といったマクロ的な視点に立ち、経済学的側面から技術移転を研究し、社会学ではある社会体系の個人と個人、個人と集団、集団と集団との関係の間での技術移転を研究し、技術生産史学では移転される新製品・新技術其のものに対する研究が行われてきたといえる。

第2部では、第1部で述べた他分野での技術移転を参考にしつつ、考古学においていかにこのような技術移転研究が活用できるかを考えてみた。考古学における技術移転を考える際に、その研究対象としたものは「波状列点文」が施文された金工製品（金銅製品・鑄造製品）である。これまでの研究では、日本国内の用途の異なる製品にそれぞれ施されている波状列点文から、それらの関係性を主張して製作工人の動態を追求しようとしたものであったが、日本で波状列点文が見られる時期には他地域においても同様に波状列点文は見られ、日本列島内の製品だけでなく、それぞれの地域の製品も考慮する必要がある。この文様は単純な文様ではあるが、

中国東北部・朝鮮半島南部・日本列島と広域に見られる文様で、用途の異なる製品に施されたものである。そこで、波状列点文の地域的移転と用途の異なる製品間での技術移転を技術の面から考えていった。

波状列点文を詳細に観察するために文様を分類し、その施文バランスを求め、それぞれの細分を行った。これらにより大まかであるが波状列点文は、4世紀中葉に中国東北域で創出され、5世紀前葉までには高句麗地域に伝わり、5世紀前葉には高句麗地域を介して新羅・伽耶地域へというルート、また新羅から伽耶へというルートと、5世紀中葉には伽耶から日本列島へというルート、5世紀後葉には新羅・伽耶から百済へというルートを想定することができた。また、文様バランスの変化により時期が推移するごとに技術レベルの変化がうかがえた。朝鮮半島南部では波状列点文が金工製品に用いられなくなるのに比例して、波状列点文の施文技術レベルは低下し、日本列島では朝鮮半島南部とは異なった様相を示し、波状列点文の施文技術レベルは一時期までは波状列点文の施文技術レベルは低下していくが、新しい施文技術の導入に伴い波状列点文の施文技術が再び上昇するということが考えられた。

文様や金銅製品の出土量などを合わせて考えてみると、5世紀中葉頃までは日本列島では鉄製品の大量保有によって権力者の優位性が保たれていたと考えられているが、5世紀中葉以降朝鮮半島南部域の権力者が金銅製品を保有していることに触発され、日本列島の権力者も進んで金銅製品を獲得しようとした結果、日本列島においても権力者の金銅製品の少量保有による優位性が確立したと想定できる。

波状列点文が日本列島において6世紀末まで多くの製品に施され続けた理由としていくつかが挙げられる。まず1つ目に波状列点文自体に何らかの意味（権力と結びつく何か）があり、それを施されている金銅製品を保有することの相対的利点がある。2つ目は、日本列島では銅鏡の波状列点文から金銅製品の波状列点文へと違和感なくそれを保有する権力者・製作

する工人に受け入れられたという文様自体がどの製品に対しても適合可能であったという適合性がある。3つ目は、波状列点文が金銅製品のどの用途、どの部位でも文様を施文することが可能であったという可分性がある。4つ目は、広域に文様が広まった要因として考えられる文様自体の単純性がある。5つ目は、他人による文様の観察が単純な文様であるから容易であったというコミュニケーション可能性がある。以上のような、技術移転されやすい新製品・新技術の特質の条件を波状列点文は備えていたといえるであろう。

今回は、波状列点文が施された金銅製品から技術移転を考えてみたが、結果として波状列点文の流れと施文技術の盛衰を資料数の偏りにより大まかな点でしか捉えることができなかった。そして技術移転に関してもう一步踏み込んでより細かく、同じ波状列点文を共有する製品を製作した工人達それぞれの関係性、波状列点文が施された製品を保有する権力者とそれを製作する工人という上位と下位との関係など考えていくためには、遺物に対してより細かな視点と金銅製品の製作地問題など考えていかなければならないがこれは今後の課題としておきたい。